

シン。時を越えて

笠利町立緑ヶ丘小学校6年 中嶋 紬

第1章 波は音を運んだ

目の前に広がる青い海は太陽の日差しをあびて光り輝き底まで透き通っていた。ここは、大木ガジュマルの木の上。心地よい風が波の音と潮の香りを運んできた。ぼくは、潮の香りを胸いっぱいすすこんだ。波の音が頭の中で響きわたった。その波の音の中に小さな声が入っていた。耳をすませると、

「だ・・れか・・助けて・・力を・・かして。」

かすれた小さな不安に満ちた声が聞こえた。シンは驚いて辺りを見回した。誰もいない。けれど、確かに、はっきりと聞いた。シンは呼んでみた。

「君は誰？」

「私の・・声が聞こえるので・・すか？」

さっきの不安に満ちて、かすれた声は、少し安定していた。

「うん。波の音に混ざって聞こえてきたんだ。ぼくは、シン。君は？」

シンは、もう一度呼びかけてみた。

「私は海の精シェル。海の精の王女です。」

シェルは答えた。今度の声は、すっかり安定していた。

「王女？じゃあ、海の中には、よう精国があるの？君は、その王女様？
どうして助けを求めていたの？ぼく以外の人とは話したの？」

シンは、一気に思っていた質問をした。

「ちょっと、あんまり、一気に質問しないでください。分からないじゃないですか。・・えっと・・ですね、あなた、シンの言うとおりの海の中には、よう精国があります。そして、私は、その王女です。ここまでは、いいですね。それで助けを求めていたわけは・・」

シェルは、口を閉じた。そして、またしゃべり始めた。

「助けを求めていた理由は、ちかごろ、海の魚たちが死んでいくのです、次々と。魚たちは、王宮に助けを求めて来るのですが、原因不明の病気にかかっている、王宮の医者も手のほどしようがないのです。それで・・王宮で死んだ魚もたくさんいるのです。じゃあ、その病気の原因を探せばいいじゃないって話になりますよね。でも、海に住んでいる私たちには、その原因を探して取りのぞくような大がかりな仕事はできないのです。そこで、私が人間たちの手をかりようと呼びかけていたところ、シン、あなたが私の声を聞いてくれたのです。よう精の声が聞こえるのは、清い心を持った人だけなのです。あなたのほかにも私の声を聞いた人はいました。だけど、みんな、よう精にできないのに、自分たちにできるわけがないと、あきらめて聞いてくれなかったのです。シン、あなたはまだ子どものようですし、力もそんな

にないと思います。でも、あなたの心の輝きは人一倍強いのです。だから、あなたならどんな試練でも乗り越えられる気がするのです。だからおねがい！あなたの力をかしてください！私たちを助けて！」

シェルの声は、ひっしだった。

シンは、頭の中で、今言われた話を整理した。

「ええと、つまり、海の中にはよう精国があって、君はその王女で、ちかごろ原因不明の病気で魚たちが死んでいって、その原因を自分たちだけの力では解決できなくて、その仕事をぼくに手助けしてほしいってこと？」

「ええ、そうです。そのとおりです。それで、手伝ってくれるのですか？くれないのですか？」

シンは考えた。海の魚たちは好きだ。魚たちが死んでうれしいわけがないし、シェルたちも、海のみんなを助けたいのは山々なのだろうけど……。だけど。その重大な仕事をぼくがこなせるの？もし、失敗したら、海のみんなはどうなるの？でも……。少しでもみんなを救えるのなら……。

「手伝うよ。」

シンは決心した。母さんと父さんには悪いけど、海のみんなを見捨てることはできないから。

「ありがとうございます、シン……。」

シェルの声はふるえていた。

「さっきは、ずいぶんと偉そうな言い方をしてしまっでごめんなさい。つい素がでてしまっ。」

「いいじゃないか。お姫様だし、それに言いたいことをそのまま言えたほうがすっきりするでしょう。」

シンは、笑いながら言った。

シェルも笑った。そして、シンの心の温かさに親しみを感じた。

「じゃっ、これからは素で接しますからね。明日、シンの家の前の海で待っていてください。迎えにいきますから。」

「えっ、なぜぼくの家の前が海って分かったの？」

「それはね、私と海は一心同体だから、あなたと同じ反応のある家が海の近くにあるとわかったのです。じゃあ明日。あっそうだ、時は朝です。日の出までに。それでは。」

そうやって、シェルの声は聞こえなくなった。シンは、とりあえず木を降り、家に向かった。

家に着くと、コーンのこうばしい香りが流れてきた。母さんが、昼ごはんを作っている。テーブルの上には、すでに、木の実の煮物にコーン入りのパンが並んでいる。父さんは、テーブルについている。

「ただいま。」

「あら、お帰り。ちょうど呼ぼうと思っていたのよ。さあさあ、ご飯にしましょう。」

母さんは、作ったバナナ入りの蒸しパンを容器に移し、テーブルについた。母さんの料理は最高だ。これ以上おいしいものはないってくらい。ぼくは、料理をほおばった。とてもおいしい。でも、よく考えたら、明日にはもう母さんの料理を食べることはできない。それに、父さんといっしょに山に行くことも、それから村のみんなと遊ぶことも……。シンの顔がくもった。でも、何をするのに行動を起こさなくては始まらない。だから、この幸せな時間を大切に過ごさなくてはいけない。明日には、ぼくはもうここにいないのだから。

第2章 その者たちは、力をつかさどるもの

日がのぼった。まばゆい太陽の光がぼくの顔に当たった。と、同時に、波のうなりが聞こえた。ふりむいた瞬間、目の前には、すきとおるような水色の髪、少しつんとした感じの、でも、とてもきれいな緑の瞳に、白い服を着た小さな、小さな女の子が立っていた。というよりは、顔の前で宙に浮いていた。シンは、びっくりして後ろにのけぞった。すると、昨日聞いた海のお姫様の声がした。

「おはよう、シン。したくはできていますか？」

シンはただぼう然として、口を開けていた。そして、やっとわれに返り、砂をはらって立った。

「できているよ。」

「それでは、私について来てください。」

シンはシェルについて行った。そして、もう一度だけ自分の村と家を見た。家の中のテーブルには、一枚の紙が置いてある。「いってきます。シン」とだけ書いてある紙が。シェルは、海の波打ち際で立ち止まり、シンに言った。

「私たちは、これから海の中に入り進むけど、息を止める必要はありません。私がここに呪文をかけましたから。それでは入りますよ。」

そうやってシェルはさっさと海に入ってしまった。シンはあわてて後をついて行った。シンは少し疑ったけど、水の中で息をしてみた。驚いたことに、本当に平気だった。それにふつうに泳いでいても、ものすごいスピードだ。シンの前をシェルは進んでいる。すると、いつの間にかシンは、サンゴとパールで光り輝く城の前にいた。シンは、海の中にこんなものがあるなんて……。と、またも驚かされてしまった。

シェルは、

「ついてきて。」

と言うと……。城には、大勢のよう精がいた。そして、シンをじろじろと見た。シェルは大きなとびらの前に来ると、そのとびらを開けた。中には、6人のよう精がいた。その中の一番奥にいるのは、王様のような。あとの5人は、それぞれ不思議なかみの色をしている。シェルは、

王様と思われる人の前に立った。

「父上，この方が，シン。私の呼びかけにこたえてくれた人間です。」
そう言うと，不思議な色のかみをした5人の中に入った。シンは，王様の前でひざまずいた。

「そなたがシンか。私は海の王，シェルの父親じゃ。今回は，我々に協力してくれたことに礼を言う。後ろの者たちは，そなたとともに旅をする者じゃ。あとで，シェルに紹介させよう。そなたには，これより，ネリヤカナヤに行ってもらおう。そこで，みな力を合わせて，時空の切れ目を防ぐのじゃ。くわしいことは，シェルに聞いてくれ。では，たのんだぞ。」

そう言って王は出て行った。シンは，シェルたちのところに行き，あいさつした。

第3章 ネリヤカナヤへ

「おい，遅れているぞ。」

炎の精，アルファが言った。今，シンたちは，がれきの山を進んでいる。海の城を出てから1か月。ネリヤカナヤに向かっている。

ここでシンの仲間を紹介しておこう。炎の精アルファ，赤いかみをしている。水の精シェル，ちょっと気が強いがしっかりした15才だ。それから風の精フーガ，クールで落ち着いたお兄さん。植物の精ヨーカは，15歳。光と闇の精ダーラ，かみが半分黒，もう半分が金色の不思議なかみをしたお姉さん。そして，最後に時の精サン，シンが最も信頼している人物だ。シンの親友だ。ここに集まったよう精たちは，各種族の王子，王女たちなのだ。

あともう一つ説明しておくことがあった。それは，時空の切れ目とは，時の精の王が弱ったときにできる時空のねじれのことだ。今，サンの父が弱っているのだ。そのため，海では，魚が死ぬなどの影響，陸では，草木がかれ，大地がわれてしまうなどの影響がおこった。それを取りのぞくため，各種族の精が集まり，ネリヤカナヤにある七色光玉を探し，光玉を時空の切れ目に当て，切れ目を防がなくてはならない。だが，光玉を手にとれるのは人間でなければならない。それも純粋な心を持った人間。けがれた心を持った人間がさわるとその人間は消滅してしまう。だからシンが選ばれたのだ。心の澄んだシンが。シンたちが進んでいるがれきの山は，本当なら緑がおいしげる野道のはずだった。だが，今は，一風ふくたびに砂ぼこりがあがり，前が見えなくなるほどだ。植物の精ヨーカは，そんなふうになった場所を見るたび涙が出た。とても悲しくて，心がしめつけられる思いだった。そのたびに，シンはヨーカをはげました。

「あと少し，あと少しすればもとにもどるから。だから，ぼくたちがが

んばらなくちゃ。」

その時、アルファの声がひびきわたった。

「海だ。」

シェルは、いちもくさんにアルファのところに向けよった。他のみんなも後に続いた。潮の香りが鼻をついた。シンは、目の前に広がった海に目をうばわれた。海は青く、広く、底は、七色の光をはなっていたのだ。シンは、これほど美しい海は見たことがなかった。そして、シンは心の中でつぶやいた。「ここが、ネリヤカナヤへの入り口なんだ・・・。」と。「行くぞ。」

アルファの声がシンにふりかかった。シンは、我に返った。そして、仲間の所にかけて行った。

浜に着いた。だが、よく考えれば、どうやってネリヤカナヤへいくのだろう。いかだを組むのだろうか。

「ねえ、どうやって海を渡るの？今、みんなは人間の大きさになっているのよ。空を飛ぶことはできないんでしょ。」

「ああ、たしかにぼくたちは、今飛ぶことはできない。でも、力を使うことはできるだろ。今回はヨーカとフーガの出番なんだよ。」

シンは考えた。風で運ぶ？今まで、シェルやアルファ、サン、ダーラの力は、旅の途中で見た。シェルは水を出し、アルファは炎を出した。サンは、魔物におそわれた時、時間をとめて逃げる時間を作った。そして、ダーラは、夜、光をともした。だが、フーガとヨーカの力は、見たことがない。いったいどうするんだ？ヨーカが、意味の分からない言葉をつぶやいた。すると、浜にあったつるがからまりあい、じゅうたんのようなものになった。

「さあ、この上に乗って。」

ヨーカが言った。

シンは、つるの上に乗った。すると今度は、フーガが空中に何かを書き、息をはいた。そのとたん、強い風がふき、つるのじゅうたんを浮かした。そして、進みだした。ネリヤカナヤへ向かって。

第4章 力、そして願い

緑に光り輝いた木々たちがシンたちを迎えた。ネリヤカナヤ・・・伝説の島。鳥たちは、あざやかな羽をばたつかせ、美しい森のハーモニーを語っていた。植物は、緑に色づき、果実は、金色の光を放っていた。そして、動物たちは、太古のままに育っていた。とても大きく、美しく。シンはすっかり魅了されてしまった。そして、金の光を放つ実を食べてみた。とてもあまく、力と勇気が満ちてきた。心の中で何かのはじけた。シンは、走り出した。行き先は、分からない。でも、何か引力のようなものにひきつけられる気がした。草むらを突っ切り、木々がおおいかぶ

さる道を走った。光が道の先の穴からもれていた。シンは、その穴に入った。中は、木の枝のドームのようになっていた。そして・・・シンは、心臓が止まるかと思った。

木の枝のドームの中には、何百という悪魔がむらがっていた。血のような赤い目と欲に満ちた血ばしった目、細く長い指の先には、血で黒くそまった爪。シンが入ったとたん、悪魔たちの視線は、シンに向けられた。そして、シンをあざ笑った。

「人間ダ！本当ニ来ヤガッタ。バカナ人間ダ！マンマトワナニカカッタ。バカダ！バカナ人間ダ！」

シンは、頭がこおりついた。わな？

「わなとは、どういうことですか？」

シンは、今にも消え入りそうな声でたずねた。

すると、むらさき色のかみに、黒いつばさの悪魔が答えた。

「我々ハ、時ノ精ノ王ニ、クスリヲノマセ、カヲ弱ラセ、ソノウエデ時空ニ切レ目ヲ入レ、百年後ノ未来カラ、毒ヲ今、コノ世界ニ入レ、聖ガツクモノ、命ノアルモノヲ殺シ、世界ヲノットロウトシタノダ。ダガ、ソコデアルコトヲ思イ出シタ。ソレハ、ヨウ精タチガ、コノコトニ気ツケバ、人間トトモニ、我々ニ立チムカッテ来ルトイウコト。ソコデ、我々ハ、ソノ人間ガ必要トスル七色光玉ノ光ヲフウジ、ソノ人間ガ来タラ、始末スルトイウ計画ヲ立テタノダ。ソシテ、オマエハ、マンマトソノ計画ニ、ハマッタトイウワケダ。」

「オマエヲ始末スル！覚悟スルガヨイ！」

シンは、どうすればよいのかまったく分からなかった。ただ心の底から敗北感がわいてくるだけだった。ここでぼく一人が戦ったとしてどうなる？ぼく一人で倒せるはずがない。シンは顔を上げた。すると、あることに気が付いた。それは、悪魔たちの奥に七色光玉があることだ。クリスタルの木でできた神台の上に黒い幕で包まれた光玉がある。

そして、もう一つ。シンは一人ではない。仲間がいるのだ。だが、どうやってみんなを呼ぼう？その時、母マーレイの言葉が頭に浮かんだ。「シン、困ったときは、大地に呼びかけてごらん。そして、信じてごらん仲間を。きっとお前の呼びかけにこたえてくれるよ。」これは、シンがまだ幼いころに教えてもらった言葉だ。シンは目をつむり呼びかけてみた。シンの姿を見て悪魔たちは面白がっている。死ぬ前に何をするのかを見て、楽しんでいるのだ。シンは仲間を信じ、呼びかけた。すると、悪魔たちのさげび声が耳をつらぬいた。びっくりして目を開けると、まばゆい光が悪魔たちをおおっていた。そして、シンの横で金ぱつのダーラが立っていた。ダーラの後ろにはみんなが。

「間に合ってよかった。」

息もとぎれとぎれにシェルが言った。

「おい、こら、今度は、一人で行動するなよ。」

いきなりアルファのお説教をくらったシンはうれしかった。みんなきてくれた・・・。

だが、感動している場合ではない。光でよろけるものの、それだけでは悪魔は死なない。すると、サンがクリスタルの木の枝を差し出した。みんなはそれに力を送り込んだ。すると、枝が剣^{つるぎ}に変わっていく。刃はクリスタル。柄には、六つの宝石が。赤に青に緑に白に黄に黒。そして、その剣をサンはシンに差し出した。

第5章 決戦の時

差し出された剣をシンは受け取った。

「使い方は分かるね。」

サンが言った。

シンは、なぜかうなずいた。本当は分かりもしないのに。すると、みんなは手をシンの背中に当てた。力がみなぎってくる。そして、背中には、大きな七色のつばさが。みんなの姿はない。

「今、おれたちは、お前の背中にいる。おれたちがついている。あきらめずに戦えよ。」

アルファの声だ。シンは悪魔たちに向かった。すると、悪魔は怒りくるった目をしてシンに切りつけてきた。悪魔の爪がシンの顔をかすった。傷口から血が流れた。そこへ言葉が流れ込んでくる。シンはその言葉を口にした。

水は命の源なり

炎は熱をおび

風は大気を動かす

草木は大地に緑を

時は過ぎ、もどる

光と闇は調和すべし

我は

六つを動かし

つかさどる者なり

シンの声はすきとおりに、悪魔を寄せ付けられない力があった。そして、シンの短かったかみはしだいに長くなった。

よう精たちよ

我の剣に力を与えよ

精霊たちよ

今ここに集え！

次の瞬間、シンは光の玉に包まれた。そして、その光の玉から出て来たシンは、白いローブをまとい、長い黒かみをなびかせ、手には光を放つ

魔法の剣をにぎりしめていた。その姿は、12歳には思えないぐらいに成長していた。そして、閉じていた瞳を開けた。まっすぐに悪魔たちを見つめる。悪魔たちは少したじろいた。だが、集団でシンにおそいかかってきた。シンはすばやく身かわし、一匹目の悪魔をついた。悪魔はすどい悲鳴をあげ、倒れて消えた。魔法で消化されたのだ。それを見た悪魔たちは後ずさった。シンは後ずさる悪魔の後ろに、目にもとまらぬ速さで回り込み、一気に3匹の悪魔を倒した。悪魔たちはさらにたじろぎ、逃げるものまでが出た。「一気に片付けたほうがいいんじゃないか？」頭の中でサンの声がした。シンは神経を集中し、力を剣に込めた。そして、次の瞬間、シンは剣を悪魔たちにふりかざした。すると、剣の先から炎と水、風に植物、光と時間の波が放たれた。時間は、悪魔たちにダメージを与え続けるために放った。木の枝のドームの中は、悪魔たちの悲鳴でゆれた。シンはこの悲鳴で耳が打ち抜かれる気がした。やがて、悪魔の悲鳴は消えた。それと同時に七色光玉をおおっていたまくは、はがれた。シンは光玉を手にとった。すると、今まで剣だったはずが、弓に変わっていた。

「シン、外に出てみる。時空の切れ目が見えるはずだ。」

フーガの声だ。

シンは、ドームの外に出た。すると、空に時空の切れ目はたしかにあった。だが、ここからでは、どうしようもない。シンが、心の中で問いかけると、

「シン、あなたにつばさがあるのをわすれていない？」

シェルの声だ。

そうか、このつばさで木の上にいけばいいのだ。シンは、つばさに意識を集中した。すると、体が浮いた。そして、木々の上へと上がった。時空の切れ目が大きく目に入った。頭の中で声がした。

「シン、今、あなたの持っている弓で、光玉を時空の切れ目にあてるのです。」

ダーラの声がした。

「がんばって。」

これは、ヨーガだ。

シンは少し、切れ目に近づいた。すると、なまあたたく、頭の痛くなるような空気が漂ってきた。シンは、七色光玉を矢に当て、弓を引いた。精一杯弓を引き、放った。矢は、七色の光を放ちながら、空中を切り、すどく、時空の切れ目に当たった。七色光玉は、時空の切れ目ではじけ、広がった。切れ目は、しばらく七色の光を放ち、消えた。すると、なまあたたく、臭いにおいは、みずみずしい空気変わった。後ろを振り向くと、がれきの山は、緑の山に変わっていた。

「よくやったな。」

アルファの手が肩にのった。

「がんばったな。」

サンの手が左の肩にのった。

ヨウガは、泣きながら、笑っていた。

シェルは、満面に笑みを浮かべていた。

フーガは、シンに一言、

「ありがとう。」

と言った。

ダーラは、笑っていた。今まで見せたことのない笑顔で。

「やった！やったぞ！」

シンはさげんだ。心からの喜びを。

心地よい風が7人のほほをなでた。

第6章 時は過ぎもどる

心時は、目を覚ました。ここは、ガジュマルの上だ。心時は考えた。あの夢のシンは、ぼくだ。100年前のぼく。シンのすわっていた木はこの木。とても鮮明に思い出せる。100年前にできた時空の切れ目から入ってきたにおいはガスのにおいだ。今、問題とされている地球温暖化。そのガスが、100年前のあの時、あの時代に入ってきたのだ。だが、今ここは、きれいな空気に水。あの時、時空の切れ目をなおしたおかげで、未来まで変わったのだ。

心時は、なつかしい仲間の名前を呼んでみた。

「サン，シェル，アルファ，ヨーカ，フーガ，ダーラ・・・。」

波の音が聞こえる。潮の香りを風が運ぶ。心時は目を開けた。そこには、なつかしい友の姿があった。

「お帰りシン。」

「ただいま，みんな。」

心時とよう精たちの間を、七色の風が通った。声が聞こえる。木々や草花、命あるものすべての声。その声は、喜びに満ちた美しい声で、メロディを口ずさんでいた。

ほら、耳をすませば聞こえてくる、そのメロディが。命は生まれて消えていく。ぼくは、生きている。今、この場所で。